



甲虫談話会の歩み

甲虫談話会

創立. 昭和 29 (1954) 年 1 月.

発起人. 土生和申, 黒沢良彦, 野村 鏡, 澤田玄正, 山本 玄, 安富和男, 吉田 晶 (ABC 順, 敬称略).

役員. 会長, 評議員, 幹事など一切をおかない, 代わって世話人数名が会の運営に当たる.

世話人. 黒沢良彦, 大野正男.

会員. 所定の会費を納め, 談話会に出席可能な地域の在住者. すなわち, 主として関東地方, および山梨, 静岡両県の在住者に限られた. 地方に転出者は自動的に翌年より除籍した. 創立会員 56 名.

会誌. 会員間の要望が強まるまで発行しない.

会合. 年数回談話会を開く.

会費. 年 200 円.

本部. 国立科学博物館学芸学部動物学科 (東京都台東区上野公園内), ただし, 昭和 47 年 (1972) より国立科学博物館動物研究部 (東京都新宿区百人町 3 丁目 23-1) に変更された.

会誌発行

昭和 42 (1967) 年 4 月 20 日, 石川良輔, 木村欣二, 小宮次郎, 黒沢良彦, 森本 桂, 中臣謙太郎, 西川協一, 須賀邦耀, 上野俊一, 渡辺泰明 (ABC 順, 敬称略) 等有志が会し, 会員より要望の強かった会誌発行の件につき協議し, 以下の事項を決定した.

会誌名. 甲虫ニュース, Coleopterists' News.

発行人. 甲虫談話会, Coleopterists' Association of Japan.

会誌編集担当世話人, 石川良輔, 木村欣二, 小宮次郎, 黒沢良彦, 森本 桂, 中臣謙太郎, 西川協一, 須賀邦耀, 上野俊一, 渡辺泰明 (ABC 順, 敬称略).

庶務担当世話人. 渡辺泰明.

会計担当世話人. 須賀邦耀.

代表世話人. 黒沢良彦.

印刷所. 星野印刷所.

備考. 会誌は当分 4 ページ, 2 段組, 内容は解説

記事, ニュース記事に主力をおき, これに紹介, 抄録などを適時加える. 記載, 採集品目録, 紀行文などは止むを得ない場合以外は掲載しない. 巻頭のカットは木村欣二氏に依頼し, 各年度ごとに組み替える, などの諸点を決議した.

諸事項の変遷

会費. 昭和 29 (1954) 年, 200 円; 昭和 43 (1968) 年, 500 円; 昭和 49 (1974) 年, 1,000 円; 昭和 52 (1977) 年, 1,500 円; 昭和 56 (1981) 年, 2,000 円; 昭和 60 (1985) 年, 3,000 円, 以後現在にいたる.

創立当時の会費 200 円が現在 3,000 円と, 間に会誌の発行などの変遷はあったものの, 実に 15 倍の値上りである.

世話人. 編集担当世話人は当初, 黒沢良彦, 中臣謙太郎および渡辺泰明が実務を担当してきたが, 昭和 49 (1974) 年より昭和 56 (1981) 年にいたる 8 年間は, 木村欣二, 小宮次郎, 黒沢良彦, 中臣謙太郎, 須賀邦耀, 渡辺泰明 (ABC 順, 敬称略) の合議制となり, 昭和 57 (1982) 年より笠原須磨生, 岡島秀治兩名となり現在にいたる. 代表世話人は当初より一貫して黒沢良彦が当たってきたが, 昭和 61 (1986) 年 3 月の黒沢の退官とともに 4 月より上野俊一に変更された. したがって, 昭和 63 年 (1988) 12 月末日現在の甲虫談話会の世話人は以下の 5 名である.

代表世話人. 上野俊一.

編集担当世話人. 笠原須磨生, 岡島秀治.

庶務担当世話人. 渡辺泰明.

会計担当世話人. 須賀邦耀, 渡辺泰明.

印刷所. 第 1~64 号 (1968~1984, iv) 星野印刷所, 第 65~83/84 号 (1984, ix~1988, xii) 創文印刷工業株式会社.

日本産甲虫目録

昭和 51 (1976) 年 5 月, 世話人会において, 日本産甲虫目録, Check-list of Japan の発行を決定. 第

1号, クワガタムシ科(黒沢良彦)を体裁見本とすることにした。既刊号数は以下のとおり。

第1集, 昭和51(1976)年12月発行。

第1号, クワガタムシ科(黒沢良彦); 第2号, クロツヤムシ科(黒沢良彦); 第3号, ハンミョウ科(中根猛彦); 第4号, ホソガムシ科(佐藤正孝); 第5号, マルドロムシ科(佐藤正孝); 第6号, ヒラタドロムシ科(佐藤正孝); 第7号, チビドロムシ科(佐藤正孝)。

第2集, 昭和52(1977)年12月発行。

第8号, ドロムシ科(佐藤正孝); 第9号, ヒメドロムシ科(佐藤正孝); 第10号, ダエンマルトゲムシ科(佐藤正孝); 第11号, コメツキムシ科1(大平仁夫); 第12号, ミジンクスイムシ科(佐々治寛之); 第13号, ホソカタムシ科(佐々治寛之); 第14号, カクホソカタムシ科(佐々治寛之)。

第3集, 昭和54(1979)年6月発行。

第15号, コガネムシ科1(野村 鎮, 小林裕和); 第16号, カミキリムシ科1(林 匡夫); 第17号, ハムシ科1(木元新作)。

第4集, 昭和55(1980)年8月発行。

第18号, ハムシ科2(木元新作); 第19号, カミキリムシ科2(林 匡夫)。

第5集, 昭和58(1983)年3月発行。

第20号, ナガハナノミ科(佐藤正孝); 第21号, テントウムシダマシ科(佐々治寛之); 第22号, ハムシ科3(木元新作); 第23号, チビシデムシ科(西川正明); 第24号, カミキリムシ科3(林 匡夫)。

第6集, 昭和60(1985)年4月発行。

第25号, ムクゲキスイムシ科(佐々治寛之); 第26号, テントウムシ科(佐々治寛之); 第27号, ホソキカワムシ科(佐々治寛之); 第28号, ハムシ科4(木元新作); 項29号, ナガキクイムシ科(野淵輝); 第30号, キクイムシ科(野淵輝)。

印刷所, 国際文献印刷株式会社。

後記) 明年から, 甲虫談話会と日本鞘翅目学会が合併し, 新しく日本鞘翅目学会として発足することになった。会誌の発行, 例会および大会の開催など, すべて学会としての体裁をととのえての発足であるから, 学会らしい会名を持たなければならない。そのためには談話会という名称はふさわしくないの、止むを得ず, 35年間も守り続けてきた甲虫談話会の名を捨て, 発足16年の日本鞘翅目学会の名称を会の正式な名称とせざるを得なかった。けっして後者に吸収合併されたものではないとはいえ, 甲虫談話会の名をたやすく捨て去ることに一抹の抵抗を感じる。

私が甲虫談話会の構想を持ったのは, 昭和28(1953)年7月の約1ヵ月にわたる北海道旅行の期間中であつた。同行の吉田 晶氏といろいろ話し合ううちに, 戦前, 東京渋谷の東京農業大学昆虫研究室内にあつた甲虫同好会のような, 関東の甲虫屋たちが一堂に会して情報の交換をし合う場をなんとか

持とうということになった。そこで, 帰京後に在京の有力な甲虫屋さんたちと相談をし, 賛同を得た方たちに発起人になってもらい, 甲虫談話会の創立を告げる案内状を発送, 翌昭和29(1954)年1月に第1回の談話会を東京上野公園の国立科学博物館1号館会議室で開いた。談話会が主体であるから, 初年度7回, 次年度には8回と, 頻りに開催したが, 私の公務が多忙になるにつれて次第に減少していった。案内状は文案, がり切り, などすべて当初は私が当たっていたが, 後には大野正男氏にお願いするようになった。当時の案内状を見れば, ガリの切り方などまったく素人の私と専門に修得された大野氏との差は一目瞭然である。

創立会員は前記したとおり, 56名であつたが, なるべく増やさないように努めたにもかかわらず, 大野氏にお願いしたところには72名に増えていた。葉書に直接がりを切るのは80名くらいが限度であつたからである。会員を関東地方と周辺に限定し, 地方に転出した会員を除籍したのも, 談話会に出席できる範囲に限ったとはいえ, 今考えるとなんとも官僚的な発想ではあるが, 会員を増やさないための苦肉の策であつた。

会には, 会長以下幹事にいたるまでの役員は一切おこなつた。そのような役員を置いて会長以下のピラミッド構造を構成するような仰山な会ではないとの私の認識からである。その代わり, 会員の中の有志が数人集まり世話人として, それぞれ分担することにした。今でいうボランティアみたいなのもので, 甲虫談話会世話人などと名刺に刷り込んだら笑われるばかりであるが, 本会が35年間も存続したのは, これら世話人の方がたのおかげである。ただし, 会誌の甲虫ニュースを発行するようになった昭和43(1968)年以降は発行者を明記しなければならなくなったので, 私が代表世話人となって, 発行者となった。今回の合併で, 主として対外的な理由によってではあるが, 会長以下幹事にいたるピラミッド型の構造を持った学会ができあがってしまったことは, 甲虫談話会の初志に背く結果になる。この点, 微力で趨勢に抗し得なかったことを創立以来の会員の方がたにお詫び申し上げる。

会誌「甲虫ニュース」はいろいろな点で, 当時国立科学博物館植物研究部の奥山春季氏が主宰しておられた植物友の会発行の会誌「植物採集ニュース」を範としたもので, 限られたわずかなページ数の中により多くの情報を盛り込む必要から, 読みにくいのは承知の上で, 横2段組みとしたものである。幸いにも, 創刊号から絶えることなく続いている木村欣二氏の手になるユニークなカットは, 他誌にはまったく見られない本誌独自のものとして内外の好評を得ている。このカットは今後も「甲虫ニュース」の存続するかぎり続くことになるであらう。

(黒沢良彦記)